
受験の気持ち

森野カエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

受験の気持ち

【Nコード】

N4103Z

【作者名】

森野カエル

【あらすじ】

机に向かい勉強をする浪人生。そばにはいつもムカつくあいつがいた。(自サイトより)

机の電気だけを付け、一心にノートに向かう。

今回も受からなければ、俺、金子裕也は三回目の浪人生となつてしまふのだ。

それだけはどうしても避けたかった。

「そこ、間違つてるよ」

「あ？どこが・・・」

後ろから覗き込んでいたジュジュが、その箇所を指差す。

「ジュ」

今は数学の問題を解いていた。
言われた箇所を計算し直す。

「・・・」

無言で裕也は数式を消していった。

「そんなんで大丈夫なの？」

ベッドに腰掛けながら、ジュジュがため息をもらした。

「・・・うるさい」

「あーあ。来年も浪人生かな」

「うるさい」

シャーペンを裕也はギュッと強く握る。

「夏に今年の試験は楽勝だ、とか言ってたのはどこの誰だか」

「うるさい！分かってるよ！」

裕也は机を叩いた。

「はいはい。油断しすぎましたー。俺です。俺ですー。夏に楽観視して遊びすぎたのはー」

イスをグルッと回して、裕也はジュジュの方を見た。

「今が大変なものも、夏の影響だって言いたいんだろ？」

「わかってんじゃん」

ジュジュはニヤツと笑った。

「ほら、お母さんから差し入れだよ」

立ち上がり、ジュジュはテーブルの上に置かれていたオニギリのつた皿を持った。

「いつの間に・・・」

裕也は全く気が付かなかった。

「休憩したら？」

ジュジュが皿を机の上に置く。

オニギリを目の前に置かれ、裕也のお腹がグウと鳴った。

「そつする」

オニギリを一つ取り、さつそく頬張る。

「・・・旨い」

「はい、飲み物」

お茶を入れたコップを、ジュジュは裕也に渡す。

「どうも」

お茶を飲み干し、裕也は一息つく。

「これだと来年も同じかな」

ジュジュの言葉に、裕也はムツとした。

「二年目だっけ？それとも三年目？」

「まだ二年目だ」

「もう、二年か早いね」

ジユジユと出会って二年の月日がたった。
いつでも腹の立つ言動をするジユジユだったが、そもそも出会いから最悪だった。

大学の不合格が決まった俺の前に、いきなり現れこういったのだ。

『パンパカパーン！おめでとうございます！浪人になったあなた様に、浪人の妖精の加護が当選しました！これから24時間365日あなた様を守護致します！』

突っ込み所が満載だが、とりあえず落ちたばかりの俺に『おめでとう』は無いだろ。

「三年目もあつという間だろうね」

ジユジユの言葉に意識を戻す。

この言葉にもムカつくが今の裕也の状態じゃあ何も言い返せない。
何か良い仕返しの方法は……。
しばらく考え、妙案を思い付いた。

「やっぱり無理無理。浪人生は来年も浪人生だ」

「ふーん。そっかそっか」

「な、何だよ」

急に態度の変わった裕也に、ジユジユは戸惑う。

「つまり、ジユジユは来年も俺といたい訳だ」

「なー！」

「そうならそうと言えよ。気付けないだろ」

「全然違う!」

顔を真っ赤にしてジュジュは否定する。

「顔を赤くしちゃって、凶星なんだな?可愛い奴め」

「か、可愛い?!」

ジュジュはますます顔を赤くした。

「俺と一緒にいたいから落ちる落ちる言っているんだろ?そうかそうか、気が付かなくて悪かったな」

「そ、そんなわけないでしょ!」

ジュジュはプイと横を向いた。

「もう落ちたって知らないんだからね!」

そのままベッドにドスンと座り、ジュジュはベッドに思い切り横になった。

「はいはい。じゃあ俺は受かるように勉強を頑張りますか」

机に向かい、裕也はまた勉強を始めた。

その裕也の後ろ姿を、ジュジュは首だけ回してチラリと見る。

そして、何も言わずに顔を前に戻し、ジュジュは目をつぶった。

3時間後。

机に突っ伏し、裕也はうたた寝をしていた。

ジュジュがムクリと起きる。

無言のまま、ベットから毛布を引っ張り出し、裕也にかけてあげた。

裕也の寝顔は健やかな物で、起こすのは可哀想だった。

静かな部屋に、裕也の寝息だけが聞こえる。

裕也の寝顔を見ていたジュジュは、そっと裕也の背中に抱きついた。

「落ちればいいのに・・・」

呟かれた言葉は裕也に届く事はなく、夜の闇に消える。

「・・・何言ってるんだろ。頑張れ、浪人生」

裕也の頬にキスをして、ジュジュは机の電気を消した。

センター試験まであと1ヶ月。

ジュジュと裕也に残された時間は、残りわずかだった。

e n d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4103z/>

受験の気持ち

2011年12月14日00時48分発行